

「真理の帯を締め」

エペソ人への手紙 6 : 13 - 17

March.8.2026

エペソ人への手紙 6 : 13 - 17 (パウロ)

Preface

先週まで、「私たちの格闘は血肉に対するものではなく、もろもろの悪霊に対するものであり、悪魔の策略に堅く立つことだ」ということについて分かち合ってきました。

今日からは、その次、「堅く立つことができるように、神のすべての武具を取る事」について考えて行きたいと思っております。

先ず考えて行きたいのは、14節の「腰には真理の帯を締め」という御言葉についてです。

Part One

ここに神のすべての武具として、6種類が挙げられております。

真理の帯、正義の胸当て、平和の福音、信仰の盾、救いのかぶと、そして御霊の剣の6種類の武具です。

この6種類の武具は、ただ羅列しているのではなく、その順番にも深い意味があることを発見します。

最初に「腰に真理の帯を締める」ということが出て来なければならない、もっと言いますと、これがあって初めて残りの5種類の武具が意味を成してくるということです。

実際にその内容を探っていきますと、「腰に真理の帯を締める」ということがすべての基礎であり、土台であり、根拠となるということが見えてきます。

この基礎・土台が弱いと、その後のすべてのことが、効力を発揮出来なくなります。

エペソ書が書かれた2000年前当時のユダヤの人々の服は、私たちが今着ている服とは大分違いました。

ポンチョのような一枚布で、頭を通したら足まで掛かる長服で、腰の帯をしっかりと締めないと、自分で自分の服の裾を踏んでしまうような服でした。

一枚布で出来ているので、着る分にはとても楽な衣服だったと思われませんが、活発に動くためには不便がところがあり、動きやすく活動するためには、しっかりと腰の帯を締めなければなりませんでした。

腰の帯をしっかりと締めていないのに、どんなに立派な胸当てを着け、動きやすい靴を履き、体を守る盾を取り、頭を守るかぶとをかぶり、剣を持ったところで動けませんし、逆に、武具を身に着けたことによって重たくなり動きにくくなるだけで、身を助ける武具ではなく、身を滅ぼす手かせ足かせに成り兼ねません。

つまり、「腰に帯を締める」ということは、まともに戦うための基本的条件

であり、それなくしては戦えない大前提だということです。

この「腰には真理の帯を締め」ということを黙想していると、私が大学生の頃のアメリカンフットボール部の先輩が、口酸っぱく言っておられたことが思い出されました。

「おい石川、太い腕、太い脚、分厚い胸板よりも遥かに大切なのが腹筋だからな。腹筋が無かったら、太い腕も、太い脚も、分厚い胸板も何の意味もないんだよ。逆に、太くない腕でも、太くない足でも、分厚くない胸板でも、強い腹筋があれば、ただ太い奴よりもはるかに強いからな。強い腹筋は、鞭という柄（持ち手）の部分で、持ち手がしっかりしてこそ初めて、ビシッと打てる鞭のような体になるんだよ。だから俺は毎日、腹筋300回やっている。お前のその垂れた腹じゃ、勝てないぞ」とよく言われていました。

確かにその先輩は、体重84kgの体で、当時クリスマスツリーと言われた体重120kgのオールジャパンの選手をパンチ一発でかち上げておられました。

まさしく、イエス・キリストを信じる者にとっての「腰には真理の帯を締め」というのは、体の腹筋に当たる部分で、そこがしっかりしていないと、どんなに他が強くて、その強さを発揮することが出来ないということです。

私たちが、主にあつてその大能の力によって強められ、悪魔の策略に対して堅く立ち、間違った相手と間違った戦いをせずに、もろもろの悪霊に対する戦いをまともに戦うためには、真理の帯で私たちの腰をしっかりとし、先ず締めなければならぬということです。

Part Two

では、「腰に真理の帯を締める」とは何を意味しているのでしょうか？

ペテロの手紙第一を見ても、これと似ていることを言っている使徒ペテロの言葉があります。

ペテロの手紙第一 1 : 8 - 13 (パウロ)

13節に「心を引き締め」という言葉がありますが、聖書の欄外を見ますと、この言葉の直訳が、「心の**腰の帯**を引き締め」だと出てきます。

ゆえに13節の御言葉の直訳は、「ですから、あなたがたは心の**腰の帯**を引き締め、身を慎み、イエス・キリストが現れるときに与えられる恵みを、ひたすら待ち望みなさい」ということになります。

「何のために、私たちは心の**腰の帯**を引き締めるのか」と言っているのでしょうか。

イエス・キリストが現れる時、つまり、**イエス様の再臨の時**に与えられる恵みをひたすら待ち望むために、私たちは心の帯を引き締めるのです。

「イエス様の再臨を、イエス様の再臨の時を、イエス様の再臨の時に起こる

ことを、主イエスの再臨の時に主イエスを信じる者たちに与えられる恵みを待ち望むことが、私たちの腰を、真理の帯をもってしっかりと締めることだ」と言います。

キリストの再臨を待ち望まずして、私たちの腰に真理の帯を締めるということにはならないということです。

確かにイエス様ご自身も仰ったように、イエス様が再び来られることによってすべてが完成し、すべてが整い、すべてが終わり、すべてが新しく始まるという福音そのものの核になるところを土台とするということです。

イエス様が再び来られる時に与えられる恵みを、ひたすらに待ち望む再臨への期待という土台なくして、胸当ての正義は神の説く正義ではなくなり、足に履く平和の福音も神の説く平和ではなく、信仰も悪魔の放つ火矢をすべて消す盾のような信仰でもなくなり、「終末における救いこそが人にとって最も大事な救いだ」と、理性・知性・頭脳をもって待ち望み続ける体の司令塔である頭を守るためのかぶととはならず、神の言葉も、両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髄を分けるまでに刺し貫き、心の思いやはかりごとを見分ける剣には成り得ません。

イエス・キリストが現れる時に与えられる恵みをひたすら待ち望むという真理の帯を締めないならば、キリストを信じるということが、時間が経てば消えて無くなってしまいうただの慰めや癒しやメンタルケア程度のものでなくなってしまい兼ねないでしょう。

私を慰め、私を癒し、私の好みに合い、私のメンタルを保たせてくれるならば役に立つ良いものだけれども、私の心をざわつかせ、惑わし、打ち、跪かせ、遜らせ、低くし、わざわざ悲しみを通らせ、今の私を労わってくれないならば、キリストを信じるということは、正義でもなく、平和でもなく、信仰でもなく、救いでもなく、神の言葉でもない、ただの御利益宗教に貶めてしまうことになるかもしれません。

聖書の説く福音を、信じるに値しない人間本意の宗教に成り下げてしまうことになるのかもしれません。

イエス・キリストを信じる者たちが、何のために戦い、誰のために戦い、何を目標に神のすべての武具を着けて戦うのか、それはイエス様が2000年前に来られたという事実と、イエス様が再び来られるという約束・啓示を抜きにして何も語ることは出来ないということです。

それでももし語ろうとするならば、それは、中身のない箱だけ立派な内容の伴わない空箱になってしまうでしょう。

イエス・キリストを信じる者の人生観、価値観が、イエス・キリストの再臨の時に与えられる恵みを待ち望むことに照準が合っているのか、いないのか。

土台としているのか、していないのか。

もしなっていないとすれば、どんなに素晴らしい武具を着けたところで、戦うべき相手と戦うべき戦いをするための武具には成り得ないということです。

Part Three

もしかすると、日本のクリスチャン人口1パーセントの壁を打ち壊すことが出来ていない最も大きな理由のうちの 하나가、この真理の帯を腰にしっかり締めていないからなのかもしれないと、私自身深刻に心に迫って来るような時がありました。

オウム真理教や統一協会などの所謂新興宗教と言われる団体が、世の中を揺るがすような事態になっていた時、その時教会は何をしたのでしょうか。

「キリスト教も日本にあってはバタ臭いなんて言われる外来の宗教扱いを受けているから、他の新興宗教と同じように怪しまれないためには、世の終末やイエス・キリストの再臨という腰に真理の帯を締めるようなことはせずに、愛されている、赦されている、守られている、導かれているという比較的人受けの良い、人々に受け入れられやすいことばかりを語るようになってはいないだろうか。

教会が、クリスチャンたちが、牧師が、神学校がそうこうしているうちに、いつの間にかクリスチャン同士であっても再臨についての認識は薄れ、再臨を語り、再臨に希望と期待をもつような分かち合いや教えはあまりされなくなってしまった、この眩しいほどの華やかさを装っている張りぼてに満ちた世界で、どれだけ気持ちよく生きていくのかばかりが信仰者の関心の的となり、イエスを信じていようがまいが、そんな大した差はないといつの間にか思わされてはいないだろうか。

主イエスの再臨より今をどう生きるのか、主イエスの再臨より今をどれだけ気持ちのいいことで過ごせるか、主イエスの再臨よりこの世界においてどれだけハッピーに暮らせるか、主イエスの再臨なんていう人からドン引きされるかもしれないことよりも、人の心を惹きつけるような楽しい話、面白い話、笑える話、美味しい話ばかりをしているうちに、いつの間にか主イエスが再び来られる恵みをひたすらに待ち望むという腰の帯を締め忘れて、緩みっぱなしにはなっていないだろうか。

果たして、イエス・キリストが現れる時に与えられる恵みをひたすらに待ち望むという心の腰の帯を引き締められているだろうか。

まことに神の武具を身に着けたキリストの兵士として活動的に、与えられたいのちを主の目に適う戦いのために生きられているだろうか」と思われます。

以前、ある聖書の学び会の中で、そこに参加されている洗礼をお受けになられて10年以上経っておられる方から、「先生、再臨って何ですか？ イエス様の再臨についてこれまで聞いたことも学んだこともありません」と分かち合っていて下さった方がおられました。

そして、そこにいる参加者皆で、深刻な面持ちで祈りました。

聖書は確かに、主イエスの再臨をもってすべてが終わり、すべてが新しくされるという結論をもって終えています。

イエス様ご自身でも、確かにそう仰っておられます。

マタイの福音書 24 : 3 - 14, 23 - 44 (パウロ)

私たちキリスト者にとっての真理の帯で腰を締めるとは、食べて、飲んで、生活の思い煩いに潰されることが無いように何とか生き延びることではなく、イエス・キリストの再臨とともに天地が消え去り、新しい天と新しい地が始まった時に与えられる恵みをひたすらに待ち望むことです。

第二テモテに行ってみましょう。

テモテへの手紙第二 4 : 1 (パウロ)

つまり、この1節の内容に共感出来ないならば、2節以降の御言葉を読む必要性が出て来ないということになります。

「生きている人と死んだ人をさばかれるイエス・キリストの現れとその御国を思って」初めて、「あなたがたキリスト者は、人生をこう生きなさい」という2節以降の御言葉が成立するということです。

イエス・キリストの現れと神の国の到来をもって腰を締めないならば、そのあと何を着ても着たことにはならないということなのです。

それでも身に着けようとするならば、写真を取るためだけにカッコいい服を着て、カッコいいポーズを取るかのような内実の伴わない似非のカッコつけてしかないということなのです。

2節以降を読んでみましょう。

テモテへの手紙第二 4 : 1 - 5 (パウロ)

私たち、再臨があるから、御言葉を宣べ伝えるのです。

イエス様が再臨される時に与えられる恵みをひたすらに待ち望んでいないならば、御言葉を宣べ伝えることは出来ないでしょう。

「耳に心地の良い話ばかりを聞こうと、聖書の教える健全な教え・福音ではない、自分の好みに従って真理から耳を背けた作り話にそれて行くばかりか、その作り話を発信する者へとなり果ててしまい兼ねない、なってしまうことにも気付けないことになってしまう」と使徒パウロ先生は、最後の遺言の言葉として残して下さいました。

腰の帯をしっかり締め、まさにこの御言葉通りに戦うならば、私たちがこの

世を生きていく上で損をする、損害を被ることになるかもしれません。

夫から、妻から、親から、子から、友人から、同僚から咎められるかもしれません。

「あなた大丈夫？ みんなそんな風には生きてないよ。 そんな怪しいところから抜け出さないと」と、近くの隣人に馬鹿にされて、コケにされて、おかしい人扱いをされるかもしれません。

だから私たちはそういうことを避けるために、腰を真理の帯で締めることはせずに空を打つような戦いをして、空を打っても汗はかくので、いい汗かいたと言っているのかもしれないと、緊張感を覚えます。

「こっそり、ひそかに、大事なものを隠し持っているかのように、信仰告白を金庫の奥底に隠し持っていて、あたかもイエス様を信じていない人のように生き、世の中に対しても、イエス様を信じていない人と同じように体を強張らせてはいないだろうか」と思われます。

Part Four

ピリピ書3章を見ますと、このことについて、耳の痛い話をしています。

キリストを信じる者とキリストを信じない者がどのように違うのかを指摘しながら、キリストを信じる者として堂々と信仰告白を生きるよう要求しています。

ピリピ人への手紙3：17－21（パウロ）

今日、キリスト教信仰が攻撃されている最も大きな試練、誘惑、落とし穴があるとすれば、それは、神がくださった天上にあるすべての霊的祝福を物質的祝福に変えてしまったことかもしれません。

神を信じれば健康になり、神を信じればお金を稼げ、神を信じれば物事上手くいき、神を信じれば欲しいものが手に入り、神を信じればどんな難関や困難も切り抜け、満足出来るものへと変わるという物質的祝福です。

18年前に受けた日本同盟基督教団の正教師試験の課題が、イエス様の再臨・終末についての論文作成だったのですが、その論文の結論部分に書いたことを最後に読ませて頂き、説教を閉じたいと思います。

こんなことを書いていました。

「日本の教会内で再臨・終末について語られない三つ目の理由は、物質的に満たされている状況の中で、世の終末などを語るのは、ナンセンスだと思っているからではないだろうか。世は人本主義的または無神論に徹した科学至上主義の流れの中で動いている。そしていつの間にかクリスチャンでさえも、世の流れに乗って生きていく中で、聖書的終末観に希望を見いだせていないのではないだろうか。

韓国でのプロテスタント宣教が、100年目にしてクリスチャン人口が全国民の25%に達しているのは周知の事実である。でも今は頭打ちになっておりなかなか25%の壁を越えることができないでいる。もちろん、宣教が漸進しない理由は多種多様に渡るものだと思うが、そのうちの一つとして、聖書的終末観の持っていないからではないだろうか。韓国で宣教が爆発的に広がっていったのは、植民地時代から朝鮮戦争時代、そして軍事政権時代までである。この時牧会者たちによって強く叫ばれたのが、イエス・キリストの再臨、そして終末に対する希望である。人々はこの希望を現実のものとして受け止め、感じ、その情熱を人々に伝えたという経緯がある。現在でも韓国教会では、幸いなことに終末や再臨についてよく語られ、受洗者クラスの学びでも必ずプログラムに取り込まれている。しかし、その受け止め方が昔と今とでは大分違うのではないだろうか。民主主義国家となり、韓国は他の国に例をみないほどの、経済的急成長を遂げた。その急成長ぶりは、戦後日本の成長以上であるとも言われている。もちろん、これは国にとっても、教会にとっても有益なことでもあるだろう。しかし、物質に満たされた生活に浸るようになったクリスチャンには、すべてが良かったとも言えないような気がする。なぜならば、終末や再臨が現実的希望に感じることが出来なくなってしまったからである。終末や再臨よりも、新しい家や新しい車を購入し、より良い学校や職場に属し、相対的価値観の支配する社会で勝者となることの方が、現実に即した希望になりやすいのではないだろうか。

これと同じことが日本でも言える。とにもかくにも、物質に満たされている日本。そんな日本に生きるクリスチャンにとってどれほど、終末や再臨は希望になっているのだろうか。

ある意味、ペテロの手紙の背景と同じような状況が現代社会にもあるのではないだろうか。にせ教師たちは間違った終末観を語り、その話しに流され信仰を捨てる者、または終末や再臨に希望を置けなくなったクリスチャンがいること、似ている気がしてならない。そんな状況で声高らかに、堂々と、そして熱心にイエス・キリストが教えてくださった終末を語ったペテロに見習うべきではないだろうか。

終末や再臨を救いの完成として見るならば、終末や再臨に希望を見いだせないクリスチャンは、救いを途中で投げ出すことにならないだろうか。

教団で作成した「聖書が教えている基本的なこと」、「聖書が教えている教会生活」、「聖書が教えている家庭生活・社会生活」という教材の中でも、終末については、ほとんど語られていない。特に「聖書が教えている教会生活」と「聖書が教えている家庭生活・社会生活」は対象がクリスチャンであるはずなのだから、正しい終末論についての項目がもっとあってもいいように思う。

人本主義的、そして世俗主義的生活に埋没させ、終末を忘れた状態にし、この世に安住して生きるようにサタンさえも導いている。だから私たちクリスチャンは世に巻かれるのではなく、天の御国の永遠のいのちを見上げながら、終末を待望する実存主義的終末信仰に根を置き、主から委ねられている救済史的使命を持って、出来る限りの最善を尽くして、信仰生活を全うしていく必要が

あるだろう。

私たちの終末を待望する姿勢は堅固に保つものの、終末の時期がいつなのかに関心を持つよりも、終末が迫っているこの時点で、どのような信仰姿勢で終末をむかえるのかについて考え、敬虔と聖潔を追及していくことが望まれるだろう。」

Conclusion

イエス・キリストを信じる者たちにとって、イエス様の再臨と終末は恐れではなく、感謝であり、希望であり、喜びです。

なんと幸いなことかと思えます。

イエス様が仰る幸いな人として、腰に真理の帯を締めながら、イエス様から目を離さずに共に歩んで行きましょう。

お祈り致します。

祝祷：ペテロの手紙第一 1：13